



第28号

筑波山の山麓一帯を「すそみ」と名づけました
 第28号 (平成25年8月1日) TEL029-866-1122 (田井の里地域づくり愛好会・森田)
 発行・すそみろく編集委員会 TEL029-863-5151 (NPO 法人つくば環境フォーラム・田中)

●わた部始動!

今年のわた部は、「山麓で育てた綿で、ちゃんちゃんこを作る」ことを目標にしました。仲間を募ったところ、約20名の部員が集まりました。月に1度集まり、午前中は畑作業、午後からちゃんちゃんこを縫う針仕事をします。「昔は、暑いうちから家族の綿入れの準備をしたんだ」というお話を参考に、春からはじまったわた部の冬支度。茅葺小屋そばの畑2畝と、金時豆畑だった5畝を借りて、目下草取りと格闘中です。12月には、収穫した綿を繰り、綿打ちして、山麓産地綿100%入りのちゃんちゃんこに腕を通せる予定! 居島真紀(わた部)



はやく大きくなれ!

わた畑で草取り格闘中! 活動の報告は <http://watabu.exblog.jp/>

●しめ縄づくり



みごとな「ごぼうじめ」が出来上がるか! 活動の報告は <https://ja-jp.facebook.com/simetan>

本年度より、しめ縄づくりを始めたいことになりました。

苗作りは、桜井登さん(協議会会長)にお願いすることにしました。田植え前に、除草剤散布、田んぼの耕作作業があり、耕作作業は人力(湿地のため)で、代掻き作業は小型機械で行い、準備完了。5月16日(木)、協議会メンバー十数名で田植えを実施。田んぼには畔をかけていないので水持ちが悪く、水管理に苦労しています。また、手作業の除草作業も数回行いました。肥料も程々に施していますが、部分的に分けつが悪く、これから標準背丈(目標120cm)になるのか? 今後の予定は、お盆前に刈り取り、日陰で干して保管。年末にはいよいよしめ縄づくりです。みなさまの参加をお待ちしています。 松崎治(六所区長)

●臼井八坂神社「おかがり」

7月13日に臼井八坂神社・祇園祭前夜の神事「おかがり」が行われました。朝から臼井の青年部及びそのOBが集結し、隣接する雑木林から10m近いご神木の松が伐り出され、置かれた松に大量の麦わらを結わえ付け、青竹と縄、ワイヤーで固定し完成。晩8時、おかがりに点火。暗闇の中、一気に20m近く炎が上がり、爆竹が大きな音をたて、火の粉が天高く舞います。地区の人々が火を見つめる祈りの空間。お神輿が火の周りを巡り地区内へ出発すると、住民も帰路につきます。区長さんによると「ご神木は境内の男松(黒松)の決まりなんだけど、松枯れで。ここ数年は女松(赤松)なんだ」とのこと。境内には数年前に県の補助を受け地区の人々が植林した数百本の男松の苗木が大事に育てられています。 横井久美(六所地区)



暗闇の中、一気に燃え上がるご神木

「すそみに」山の仕事「があつたころ」筑波山ふもと図鑑「語りの集い」を開催

別冊すそみろくとして発刊された「筑波山麓ふもと図鑑」。去る5月5日(日)、神郡のカフェ&菓子工房ソレイユ2階にて「筑波山麓ふもと図鑑」を使った「語りの集い」が開かれました(主催NPO法人自然生クラブ、筑波山麓グリーンツーリズム推進協議会)。

語り手の木村嘉一郎さんは、昭和4(1929)年生まれ、こととして84歳。六所区長を務め、明治43(1910)年に廃社になった六所神社など地域の歴史を調べてきた。木村さんの当日の話は主に明治以降から戦後までで、ここで紹介するのはその抜粋。話題にある「田井村共有林」は、神郡村と臼井村を合わせた入会地として江戸時代の正保2(1645)年に旗本、井上氏の所領から始まる。元禄8(1695)年に臼井村分が筑波山知足院領となり、その後複雑な経緯をたどる。木村さんは現在、江戸から明治にかけての山の歴史を調べている。ここでは詳細は触れられないが、成果に期待したいところだ。



にこやかに話してくださった木村さん 詳細は <https://www.facebook.com/fumotozukan/notes>

編集を終えて.....

「筑波山麓ふもと図鑑」を使った「語りの集い」が始まりました。かつて、筑波山麓には、山の豊かな自然と共に暮らしてありました。山を育て人も育てた先人たち、山に親しみ、自然の中で命がつながる大切さを学び取った子どもたち。「語り」を通して、様々な先人たちの思いを未来につなげればと思います。



イラスト: 田井小学校2年 T君

すそみサポーター 敬称略

筑波山神社	つくば市筑波
杉田慶也	つくば市小沢
飯田 隆	つくば市神郡
武平ファーム	つくば市小田
出口正義	土浦市

※協賛会員「すそみサポーター」募集中! 一口3000円

デザイン: 小沢陽子(漆所地区)

私たちが応援しています!



なごやかな雰囲気の中で「語りの集い」が行われました

【木村】山の話をしたと思います。ここから(神郡)見える山のひとつは、かつて田井村の共有林だったんだ。

そもそも共有林は、明治14(1881)年に当時の神郡村が(明治政府から約250町歩(250ha)の払い下げを受けたときに、個人、ひとりひとりの所有にしないで、村として払い下げてもらった。

さきほどこの地区のひとつは性格がいいという紹介がありました、そ

これはこの山の払い下げの受け方にも出ているんだな。

明治時代に、官地を個人に払い下げたときに、大地主になったひとは大勢いるけど、村の共有財産として受け入れた。

当時の神郡村は110世帯くらいあったようだが、大変だったと思うんだよな。いまでは想像もつかないと思うけど、10年くらいで80万本も

▲共有林による恩恵

【木村】村の山がみんなの利益になるのは主に大東亜戦争（第二次世界大戦）が終わってから。その話については、細草川の上のあたりに碑が立っていて、そこに詳しく書かれています。碑は、山について知って欲しいということ、当時6人が集まって神郡共有森林会が建てたものです。当時、学校はいまの普門寺にあったんだ。

みなさん、婆ヶ峰ばあがみねって知っていますか？ここから歩いてほしい2時間はかかると思うけど、当時の運動会は婆ヶ峰でやったんだ。

これは私の想像だけれど、なぜわざわざ婆ヶ峰でやったのかというと、子どもたちに共有林が見渡せる場所に行つて、山の大切さと大きさを教えたかったんじゃないかと思うんだ。

植林してる、こんなすごい仕事をしているんだ。連帯意識というの、こんなところから生まれているんじゃないかなあと思うんだ。これは自慢できる話だと思う。

植林は、明治25（1892）年くらいから始めた。それ以前は、屋根が草屋根だったから、その萱を刈るくらいしか考えがなく、植林はやらなかったんじゃないかなろうか。

それから、学校が終わってからの青年だな、16〜18歳位、20歳前の青年を集めて10月から12月くらいまで夜学をやったんだ。そこで山林について講義をやっているんだ。それくらいこの地区は山林の教育をしっかりやってきた。

自然を大切に、親しむということ、そんな環境に育ってくれば人間というのは、穏やかになってくるんじゃないかと思うんだよな。

自然ついでいえば、たとえば庭に落葉が一枚落ちているとするよな。それが桜の葉だったり、樺だったりする、それを邪魔者と思うか、見方によって変わってくるよな。たとえば落葉は自然が次の命につながる過程だと思つて、大切なものと思うか。それによって違ってくるよな。

▲山仕事について

【木村】山仕事は一年中だ。冬は落葉さらつたり、薪をとつたりする。春になると草を刈つて肥料にする。秋は木をきつたり山仕事がきつくなる。年中山にはいつている。

この地区は、（田や畑の）耕作面積は他の地区に比べて半分くらいから三分の二くらいかな。それでも収入の面で安定しているのはなぜかとなったれば、この土地は冬作でも、けつこうできる、それから山の副産物が採れる。

山の副産物というのは、薪だな。家によつてはでっかい木小屋を二つももつていて、薪を採つて乾燥させ売った。材木は村の財産だけど、薪は個人で採ることができた。

ただ、火事になったときは、家を新しく建てるときに、四間×七間（二間は約1・8m）の家を建てるだけの梁と柱について（共有林の木を



共有林の松は、今も田井小学校に残っています

無料で）使うことができた。

山に植えたのは、松、杉。場所によって檜、それに土地の悪いところにはクヌギ。クヌギの場合は、7〜8年で薪になって金になるからな。

乾燥するところは松、土地の悪いところは檜、湿地帯には杉を植えた。払い下げを受ける前は、当時の史料を見ると（入会地だったので）主だった木は生えていなかった、せいぜい茅やぐらくらい。そこに自然の木や草が生えていたくらいじゃあないかと思うんだ。

山の草管理は、肥料など欲しいひとがそのひとの力によつてやった。精農家は、草刈りや落ち葉掻きを一生懸命にやつたし、割と仕事する事がいやなひととはあまりやらなかったり。大正2（1913）年に『田井村の郷土史』が書かれた。ここには人糞を金に換算している。それだけ大切な資源ということ。山からの落ち葉や草は、人糞なんかと混ぜて肥料にしていた。各家庭にはどこにも肥料小屋というのがあった。露天で肥料を作ると成分が逃げてしまうので、屋根の下で作った。いやあ、今からちょうど百年前にこうした暮らしをしていたと思うと、あまりでかい顔できないよな人間は。

落ち葉一枚でも山のありがたさを感じられれば。

いまは山は（荒れてしまつて）邪魔者みたいに思っているかもしれないけど、我々は山には世話になつていると思うんだ。だから、大事にしてもらいたい。



○「語りの集い」を終えて

田井地区のことを知らない方もいたので、榎田智司さん作詞・作曲の「桃源郷（続く道）」を筑波山麓の四季の画像とともに流した。また、木村さんの語りの後に神郡の櫻井勇さんの手書き地図をみながら語り合った。昭和6（1931）年生まれの勇さんが子ども時代遊んだ山麓の地図は、木村さんの語りを裏付ける資料として有効だった。

昭和30年代以降の石炭から石油への燃料革命により、山林の経済的価値が相対的に後退。山で仕事をした方が高齢化するなかで、その記憶も年々薄れてゆく。過去は未来を描く

道しるべであればこそ、木村さんをはじめ山の語り部の記録は貴重であり、いま取り組まなければならぬ喫緊のテーマといえる。

野末たく二（結エディット）

○「語りの集い」に参加して

ほのぼのしてましたね。ケーキも美味しかったです。最も勉強になったのは、山には杉、松、檜など沢山の種類の木が植えてあつたけれど、茅を一番栽培していた、ということ。山も耕作地だったという話が新しい発見でよかったです。

寺崎拓男（土浦市藤沢）

【山に関する補足史料】

木村嘉一郎さんの語りを補足する上で『筑波町史（下巻）』の以下参照（Pは同書ページ数）。

・明治23（1890）年の世帯数、人口は神郡「114世帯、784人」、田井村全体で「320世帯、2107人」／P213

・青年会は、田井村に限らず、日露戦争後に国威発揚の意味から各地で行われ、旧・筑波町域では田井村のほか小田村、作岡村、田水山村、北条町などで実施。内容は貯金、新聞など図書共同購入・閲覧、講習会、夜学、道路や堤防の補修など多岐にわたる／P266～273

・明治14（1881）年に払い下げの田井村共有林は、その後、臼井村と神郡村との間で所有者が変遷していく／P351～352

・山がもたらした恩恵として「一般的農産物のほか、同村の特徴をなすものに年額1万円を超える薪炭（まき、すみ）、700円程度の氷製造、水車を使つての製粉業（同2～3万円）、製麺業（1万円）など」とある。当時の米価を1kg0.1円（10銭）、現代の米価を1kg300円とすれば当時の円の価値は現代の約3000倍。田井村の山の恵みがいかに大きなものであったかが分かる／P394～397